

ピア・レスポンス指向性と役立ち度との関連

Relationship between Peer Response orientation and usefulness

富永 敦子

Atsuko TOMINAGA

向後 千春

Chiharu KOGO

早稲田大学大学院人間科学研究科

Graduate School of Human Sciences, Waseda University

早稲田大学人間科学学術院

Faculty of Human Sciences, Waseda University

〈あらまし〉本研究では、学習者のピア指向性を調べるための質問紙を作成し、大学生を対象に調査を行った。その結果、改善指向、開示指向、協同指向、仲間指向の4つの因子を抽出した。この中で、改善指向は文章を書くことへの好き嫌いとの相関が高く、開示指向と仲間指向はグループワークの好き嫌いとの相関が高かった。また、改善指向と仲間指向は、ピア終了後の役立ち度との相関が高かった。

〈キーワード〉 協同学習 高等教育 学習者特性 ピア・レスポンス 尺度

1. はじめに

ピア・レスポンス(以下、ピア)とは、文章作成過程において、仲間同士が話し合いを通じて、協力的に学習を行う方法のことである(大島ら, 2005)。ピアの効果としては、リソースの増大と相互作用による理解深化が挙げられる(池田・館岡, 2007)。ピアでは、話し合いを通じて、お互いのリソース(方略や知識)を出し合い、共有するようになる。また、自分の文章について説明したり、他の人から意見や質問を受けたりすることにより、書き手の自己モニタリングが促進され、理解が深まる。

しかしながら、学習活動においては得意不得意の個人差(学習スタイル)が存在する。ピアのような学習方法を好む人もいれば、そうでない人もいるはずである。もし、学習者のピアに対する指向性がわかれば、その指向性に合わせた指導ができ、より高い効果を得ることができると考えられる。そこで、本研究では、学習者のピアに対する指向性を調べるための質問紙(パイロット版)を作成し、調査を行う。また、外的妥当性を確認するために、文章を書くことやグループワークの好き嫌い、ピアの役立ち度との関連を調べる。

2. 方法

2.1 調査対象

文章表現の授業を履修している大学生80人を対象に、ピアの指向性に関する質問紙調査を行った。回答者数は62人(回答率77.5%, 男子52人, 女子10人, 平均年齢19.05, $SD=1.37$)であった。除外データはなかった。

2.2 質問項目の作成

ピアの指向性に関する質問32項目を作成した。作成にあたっては、ピアに関する自由記述のアンケートを参考にした。このアンケートは、文章表現の授業で約1年半にわたりピアを行ってきた専門学校生14人(全員女子, 平均年齢19.43, $SD=0.49$)を対象としたものである。

本質問紙は、「とてもあてはまる」～「まったくあてはまらない」の5件法で実施した。また、フェイスシートでは、文章を書くことやグループワークの好き嫌いについて、それぞれ「大好き」～「大嫌い」の5件法で回答してもらった。

2.3 授業アンケートの実施

本授業では文章作成の課題を行い、隔週でピアを4回行った。グループの人数は4～5人で、毎回同じメンバーだった。ピア終了後、ピアの役立ち度について5件法で調査した。分析対象は、前述の62人のうち、ピアに3回以上出席した48人(男子41人, 女子7人)であった。

3. 結果と考察

3.1 質問項目の検討

質問項目についてG-P分析およびI-T相関を求めたところ、2項目が有意でなかった。この2項目を除外し、残りの30項目について因子分析を行った(最尤法, プロマックス回転)。その結果、スクリープロットの急落から5因子を抽出した。因子数を5に指定し、負荷量が.50未満の項目と.50以上の多重負荷の項目を除外しながら因子分析を行ったところ、解釈可能な4因子15項目が得られた(表1)。

因子の下位項目をもとに、因子1は「改善指向」,

表 1 探索的因子分析の結果

	因子 1 改善指向	因子 2 開示指向	因子 3 協同指向	因子 4 仲間指向
2) 自分の文章をメンバーに見てもらふことにより、文章力を向上させたい	.741	-.014	.020	-.011
6) 自分の文章について、ピアのメンバーからいろいろな意見をもらえるのはうれしい	.719	-.072	.189	.211
7) ピアで自分の意見を述べることは有意義だと思う	.656	.032	.026	.143
10) メンバーの文章を見ることにより、自分の文章力を向上させたい	.646	.289	-.172	.172
30) 自分の考えを話すことが苦手である ※	.151	.818	-.022	.045
14) 自分の意見に反論されると、黙ってしまう ※	-.270	.648	-.151	.183
9) 自分の文章を人に見られるのは恥ずかしい ※	-.057	.639	-.027	-.136
4) ほかのメンバーの文章について意見を述べるのは苦手である ※	.148	.599	.056	-.227
32) ピアで初対面の人と話すのは抵抗がある ※	.147	.587	.153	-.401
17) メンバーの中に能力の低い人がいると、イライラする ※	.180	-.133	.840	.007
26) 自分の文章の問題点をメンバーに指摘されると、不愉快になる ※	-.364	.194	.699	.229
19) 文章力が自分と同程度、または自分より低い人からのコメントは役に立たない ※	.031	.006	.677	-.018
25) 文章について学生同士で話し合っても無駄だと思う ※	.020	.039	.635	-.165
29) ピアで話し合うのは楽しい	.499	.002	-.011	.591
1) ピアでいろいろな人に出会えるのがうれしい	.277	-.146	.014	.583

※は逆転項目 累積寄与率 55.86%

表 2 相関係数

	因子 1 改善指向	因子 2 開示指向	因子 3 協同指向	因子 4 仲間指向
文章を書くことの好き嫌い	.329 *	-.069	.125	.074
グループワーク好き嫌い	.189	.344 **	.071	.536 **
ピアの役立ち度	.386 **	.015	.167	.327 *

因子 2・因子 3 は逆転項目なので因子得点の正負を逆にして算出した
** $p < .01$ * $p < .05$

因子 2 は「開示指向」、因子 3 は「協同指向」、因子 4 は「仲間指向」と命名した。信頼性についてクロンバックの α 係数を求めたところ、全 15 項目では .824 であった。各因子の α 係数は、因子 1 が .786、因子 2 が .807、因子 3 が .804、因子 4 が .742 であった。 α 係数が高いことから、本尺度の内的整合性が認められたといえる。

3.2 文章を書くこと、グループワークの好き嫌いとの関係

まず、文章を書くことの好き嫌いの得点と因子得点の相関係数を求めたところ、改善指向のみ有意な正の相関を示した ($r = .329, p < .05$)。改善指向は文章力を向上させたいという因子である。文章を書くことが好きな人が、文章力を向上させたいと考えるのは当然であり、この結果は妥当である。

次に、グループワークの好き嫌いの得点と因子得点の相関係数を求めたところ、開示指向および仲間指向との間に有意な正の相関を示したが ($r = .344, p < .01$; $r = .536, p < .01$)、改善指向および協同指向は有意でなかった。

改善指向はグループワークとは関係ないので、相関がないのは当然であり、この結果は妥当である。一方、仲間指向、開示指向、協同指向はグル

ープワークに関連する因子である。3 つの中で協同指向のみ相関が有意でなかったのは、活動内容のレベル差によるものと推測する。

仲間指向はメンバーと楽しく話すこと、開示指向は自分の文章をメンバーに対して抵抗なく開示できることを示している。これに対し、協同指向は、能力が異なるメンバーの意見を受け入れ、ともに学ぶことを示しており、より高いレベルの活動である。大学生がグループワークが好きという場合、仲間指向や開示指向のレベルでは好きであっても、協同指向のレベルでは好きではないということなのかもしれない。

3.3 ピアの役立ち度との関係

ピアの役立ち度と各因子の因子得点の相関係数を求めたところ、改善指向および仲間指向との間に有意な正の相関を示した ($r = .386, p < .01$; $r = .327, p < .05$)。すなわち、文章力を向上させたいという人ほどピアの役立ち度は高く、またメンバーと話すのが楽しいという人ほど役立ち度が高かった。

以上のように、本研究では、学習者のピア指向性を質問紙で測定できることを示唆できた。今後は、調査対象者数を増やし、尺度の信頼性および妥当性を高める必要がある。

引用文献

- 池田玲子, 館岡洋子 (2007) ピア・ラーニング入門. ひつじ書房, 東京
大島弥生ほか (2005) ピアで学ぶ大学生の日本語表現. ひつじ書房, 東京